OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『鎮魂歌』の時代 : 1930年代
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 1984, 67, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81026
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『鎮魂歌』の時代
——1930年代——

武 藤 洋 二

ВРЕМЯ "РЕКВИЕМА"

Муто Ёдзи

Содержание

Предисловие

Глава Первая

О том, как "И ненужным привеском качался
Возле тюрем своих Ленинград".

Глава Вторая

О том, "Как они горят".

Примечания

序

アンナ・アフマートヴアは,「沈黙」のなかで民衆詩人になった。

民衆の苦しみを書くことが許されないとき,詩は,密室でつくられた。生れた詩は,印刷することも,回覧することも,朗読することもできなかった。詩は,この時代を生きのびるために,記憶のなかにしまわれた。詩人は,わすれないように,詩を反復した。祈りのように心のなかでつぶやいた。

一人息子のレフが,とつぜん逮捕されたとき,詩人は,肉親の死におびえる民衆の一人になった。殺されることは,めずらしくない時代であった。

レニングラードに十字架の形をした監獄がある。それは十字獄とよばれている。レフは,まずそこへいれられた。アフマートヴアは,差しいれのために監獄のまえにならんだ。そこには,同じ運命の女たちが,長い列をつくっていた。

十字獄はネヴァ河のほとりにある。対岸には内務人民委員部の建物が見える。その巨大な,表札のない建物は,「大きな家」とよばれている。レフは,この「大きな家」から派遣された者によって逮捕され,十字獄にいれられ,収容所へ送られるのをまっている。アフマートヴアは,十七ヵ月間,決められた日に[注1)],ここの列にならんだ。

ある日，列のなかで誰かが詩人に気がついた。

「もちろん，わたしの名を一度もきいたことのない，青い口びるをしてその時わたしの後に立っていた女が，わたしたち皆に特有の自失状態から我にかえって，私の耳元へ口をよせてたずねた（そこでは皆ひそひそ声で話していた）。

『ところであなたは，この状態が書けますか』

それで，私は云った。

『できます』

すると，かつては彼女の顔であった物のうえを，微笑のようなものがかすめた。」[注2)]

一人の囚人の母親として立っていたアフマートヴアは，苦の行列に詩人として立ちむかうことが要求される。国家権力によって詩の発表が十数年も前から許されていない無用の詩人[注3)]は，民衆から詩の注文をうけた。人間の苦しみの表現という文学の重要な課題から手をひくなら，強制された沈黙は，自発的な沈黙にかわってしまう。

アフマートヴアは，「できます」と答えることによって，沈黙に鉤かっこをつけ，この「沈黙」のなかで，苦の行列を文学化する仕事にとりかかる。

アフマートヴアの名を聞いたこともない女からの問は，挑発的である。それは，この時代における詩そのものの存在価値を問うている。この列にならんでいる者には，詩どころではない。頭にあるのは，詩ではなく死である。

十字獄の前の行列は象徴的である。肉親が十字架にかけられ，その下で女たちが立ちつくす。詩人は，十字架上のキリストとその下でなげくマリヤの姿と重ねて，この女たちを歌うことになる。

アフマートヴアは，レフを歌うことによって同じ運命の無数の囚人を歌い，母親としての自分を歌うことによって無数の母親たちの苦しみを歌った。詩人の苦しみと民衆の苦しみが一つの歌になった。

十字獄の前にならんでいる女たちには顔がない。それは，感情をあらわすことを恐れ，単なる物になっている。詩人の妻として監獄の前にならんだナジェージダ・マンデリシタームは，この時代の人間の顔について回想している。列にならんでいる女たちの目は涙と不眠で赤かったが，泣きだすような者は一人もいなかった。彼女たちは，感情をおさえており，「まるで顔にアイロンをかけたかのようであった」。人前では悲しみをあらわせないため，「彼女たちにあるのは顔ではなくて，仮面であった」。[注4)]

苦しみ悲しみをあらわすことは，国家権力への敵対を意味する。民衆は，「仮面」をかぶった沈黙の集団になる。

この状況のなかで詩人がひきうけたのは，民衆の顔になることであった。それは，「仮面」のうえで，かって顔であった物のうえで凍りついている感情を表わす仕事である。「できます」とは，この役割をひきうけたことを意味する。

苦しみに作品世界という場を与え，永遠化することによって，詩人は，孤立無援の苦しみに意味を与える。そこでは，苦しみの無意味さすらが意味づけられる。このことによって，生が意味づけられる。詩人にむけられた微笑の代用品は，それへの願いを表わしている。

アフマートヴアは，その場を鎮魂歌と名づけた。

1

スターリンは，山脈を平野にしようとした。スターリンという山だけがそびえるように，他の山は平らにされた。

この下仕事にたずさわった内務人民委員エジョーフは，スターリンにイヴアン・ヴアシーリエヴイッチという暗号名をつけた[注5]。これは，イヴアン雷帝のことである。

スターリンは，雷帝を参考にした。しかし，彼は，ロシヤで最初にツアーリと名のった専制君主を，その権力集中の仕事の点で，はるかにひきはなした。スターリンの前では，雷帝の伝説的な残虐さも色あせた。

雷帝は，忠実で強力な私兵オプリーチニキをもっていた。彼らは，犬の頭で馬首をかざり，獣毛のほうきを手にしていた。これは，「最初，犬のように噛つき，そのあとで，余計なものをすべて国内から掃きだす」[注6]ことを意味した。

イヴアン雷帝は，僧侶として祈りをかかさなかった。オプリーチニキの軍団の上層部は，雷帝を長とする僧団であった。彼らは，剣と錫杖とを合わせもっていた。彼らは僧服をきていた。

宗教的によそおい，宗教的に組織された集団が，殺掠をおこなった。祈禱は殺人者を清め，殺人は神を後だてにしておこなわれた。雷帝は，オプリーチニキを使って，将来自分にとって代りうる大貴族たちを消していった。

スターリンは，このような雷帝を賞讃した。社会主義国の指導者が，暴君をたたえることは異常である。しかし，いかなる国家権力をも無くす共産主義社会の建設を旗じるしにしながら，社会主義国家のなかで独裁的権力を手にしていくスターリンは，神にひれふしながら殺人をくりかえした雷帝と共通点をもつ。

しかし，雷帝はスターリンにとって，不十分な教師であった。彼は，雷帝が大貴族を五人残しておいたのは誤りであった，とのべている[注7]。

スターリンは，根こそぎにする。その仕事の最大の山は，レフが逮捕された1930年代の後半である。

1934年12月１日にキーロフが暗殺された。彼は，党政治局員であり，党中央委員会書記をかね，同時に，レニングラード州党委員会第一書記であった。彼は，ソヴエトの最高指導者の一人であり，レニングラードの第一人者であった。スターリンによるジノーヴィエフ派一掃の仕事にたずさわりながらも，彼の云いなりにならない最後の大物であったキーロフは，内務人民委員部にやとわれたレオニード・ニコラーエフによって射殺された。場所は，ソヴエト権力の成立がレーニンによって全世界に宣言されたスモーリヌイである。スターリンは，刺客ニコラーエフに，ジノーヴィエフとカーメネフの指示によって行動したと自白させるつもりであった[注8]。彼は，キーロフの暗殺をきっかけにして，生き残っているレーニンの人脈を消し去る計画であった。トロツキイ，ジノーヴィエフ，カーメネフ，ルイコフ，ラーデック，ブハーリン等の十月革命の指導者た

ちは，すでに1920年代末までに国家の要職から解任され，党から除名されて，実権は失っていた。しかし，彼らは生きていた。生きているかぎり，スターリンにとって代る可能性があるとみなされた。

スターリンは，ニコラーエフに思いどおりの自白をさせることに失敗したが，キーロフ暗殺を十分に利用した。数年後におこなわれる「モスクワ裁判」で，被告たちは，キーロフ暗殺の指令をだしたことを「自白」させられた[注9]。

キーロフ暗殺後，レニングラードで大量の逮捕がおこなわれた。アフマートヴアの息子レフも内縁の夫ニコライ・プーニン[注10]もこの大波にさらわれた。

1935年5月13日，「人民の敵」の絶滅作業を指導するため，党政治局に保安特別委員会をつくることが決定された。この委員会には，スターリン，ジダーノフ，エジョーフ，シキリヤートフ，マレンコーフ，ヴィシンスキイが入った。この委員会の存在は民衆には公表されなかった[注11]。この委員会は，内務人民委員部にたいして，各階層における粛清者の割合まで指示していた[注12]。第一線で「人民の敵」狩りをおこなう者は，手にかけた犠牲者の数が多ければ表彰され，少なければ自分自身が危険にさらされた。彼らは，割り当てを超過達成するために，はげむことになった。いかなる組織も団体も，それが大学であれ工場であれ役所であれ芸術家の集りであれ，粛清の対象者を摘発しなければならなかった。どこでも，自分をまもるために自発的に生贄をさしだした。

レフがさらわれると，アフマートヴアは，リージイヤ・セイフーリナ[注13]のところへかけつけた。彼女は，勇気をもって党中央委員会や内務人民委員部へ電話をかけてくれた。

彼女は，アフマートヴア自身がスターリンあての手紙をクレムリンのクウターフィヤ塔へ持ってくれば，秘書のポスクリヨーブイシエフがスターリンに手わたしてくれる，という答えをもらった。ポスクリヨーブイシエフは，スターリンの忠僕であり，エジョーフの下づみ時代からの友人である。エジョーフは，彼の後おしで，田舎の活動家から党中央の勤務につき，三年後に党中央委員会人事部長になり，以後，異常なはやさで出世していった。ポスクリヨーブイシエフは，スターリンの窓口であり，書類カバンであり，郵便受けであった。スターリンの秘書ポスクリヨーブイシエフは，主人に半生をささげ，その死とともに行方不明になった。

アフマートヴアは，手紙をもってモスクワへ行き，パステルナークの家で結果をまった。ポスクリヨーブイシエフ自からパステルナーク家に電話をし，吉報をつたえた。レフとプーニンは，その日のうちに釈放された。

レーニンは，遺言で「スターリンは気まぐれだ」と書いた。権力者の「気まぐれ」が奇蹟をもたらした。

「これは，どうやら，ヨシフ・ヴイサリオノヴィッチの全生涯を通じて，唯一の善行だった」と，アフマートヴアは後に回想する[注14]。「スターリンは，歴史が知っているかぎりの最大の刑吏です。ジンギスカン，ヒトラーは，彼の前では，小僧っ子にすぎません」[注15]。

この「刑吏」の「善行」への感謝は，偶然にたいして感謝するのと同じであった。

イスラエルの首相であったベギンは，ソヴエトの収容所を経験している。彼は，スターリンあての手紙について，獄中で話をきいたことがある。ウクライナ共産党書記長でのちにプラヴダ副編集長になったガーリンの妻は，1937年に逮捕された。妻は自殺しようとするが，その前にスターリンに手紙を書いた。スターリンは，病気の彼女をクレムリン病院に移し，党員証を返すように指示した。これは，夫婦にとって「生涯最良の日々」であった。数ヵ月後，彼女は再び逮捕された[注16]。

彼女にとって，逮捕も釈放も再逮捕も晴天の霹靂であった。本人からみれば，すべて偶然である。

この時代では，個人にふりかかる国家権力の災は，あまりにも一方的で唐突なので，偶然としか説明できなかった。逮捕されないでいることも，偶然であった。外国人の知人友人をもち，数しれないほど外国に行き，しかもユダヤ人で非党員であったエレンブルクは，自分がスターリンの死後まで生き残れた理由を，「人間の運命がチエスの勝負でなく宝くじをおもいださせるような時代に生きていた」[注17]からだと説明している。つまり，偶然に生き残れたといっている。

エレンブルクは，逮捕されそうな気配を感じたとき，スターリンに手紙を書いた。彼は逮捕をまぬがれ，今までどおり外国で働くことが許された。なぜか。「分らない」としかエレンブルクはいえない。「分らない」は，偶然の云いかえにすぎない。アフマートヴアもまた自分が生き残ったのは，偶然だと，強調することになる。

権力との関係が，「宝くじ」のあたりはずれであれば，個人はどうしようもない。個人の運命が偶然ということばでしか説明できない時代のまっただなか，1938年にレフは再び逮捕された。

レフの父親は，アフマートヴアの最初の夫ニコライ・グミリョーフである。彼は，アクメイズムを代表する詩人であった。二人は，1910年に結婚した。1912年10月１日レフが生れた。これは，アフマートヴアの第一詩集『夕べ』が出版された年である。1918年二人は離婚した。アフマートヴアは，同じ年の８月にアッシリア学者シレーイコ[注18]と再婚した。1921年春に彼と離婚した。この年の８月24日グミリョーフは，反革命活動のため銃殺された[注19]。なぜソヴエト権力にたいして剣をぬいたかという予審判事の問いにグミリョーフは，「帝政派だから」と答えた[注20]。

銃殺された父グミリョーフのかたきうちのために，ジダーノフ[注21]を殺すようにと母アフマートヴアがレフをそそのかした，というのがレフにつけられた罪状であった[注22]。この荒唐無稽ないいがかりは，例外的なものではなかった。内務人民委員部は，「人民の敵」の子供たちを，親のかたきうちをする危険分子とみなし，はやくから逮捕することになっていた。

家族に犠牲者がでると，その一家は，「人民の敵」の家族として迫害され弾圧される。家族全体が迫害される中世的な状況のなかで，アフマートヴアは，奇妙な例外であった。息子も夫も逮捕されながら，彼女は，流刑にもならず，1925年から詩の発表が許されないこと以外には，直接的な弾圧はうけなかった。ジダーノフ殺害を息子にそそのかしたというのであれば，当のアフマートヴアがまっ先に逮捕されるはずであるのに，無事であった。

アフマートヴアは，いつ逮捕されるか分らないという精神的な拷問にかけられていた。この待機の状態に，無数の人間がおかれていた。カバンに下着をいれて，いつ逮捕されてもいいようにそなえながら，日常生活をおくらなければならなかったことについて，ショスタコーヴィッチから現在生き残っている無名の老人まで証言している。八十才をすぎたある東洋学者は，カバンに下着と生のにんにくをいれて逮捕をまったと，著者に語った。にんにくは，極地の収容所で壊血病にかからないためであった。

アフマートヴアがつかまらなかったのは，レフが身代りにされたから，あるいは，人質にされたから，だと解釈された。アフマートヴアもレフも第三者も，この点では一致していたと思われる。

アフマートヴアは，流刑中の詩人オーシプ・マンデリシタームに詩をささげた。その詩の一節は，このころの彼女自身の状況をあらわしている。

寵を失った詩人の部屋では
恐怖と詩神が交代で番をする
夜明けを知らない
夜がふけていく[注23)]

「ソヴエトには，共産主義によって約束された経済の平等はない，しかし，内務人民委員部の王国には一つの平等がある。それは，恐怖の平等である」[注24)]と，ベギンは皮肉っている。あとになって，ベギン自身は，シオニストとして，パレスチナの民衆に「恐怖の平等」をふるまう。

1936年8月，第一回「モスクワ裁判」がおこなわれ，ジノーヴィエフ，カーメネフなど十六人の被告全員が銃殺された。このあと，長年スターリンの匕首であったゲンリフ・ヤーゴダが内務人民委員を解任され，党中央委員会書記のエジョーフが後をついだ。保安特別委員会の一員が自から現場の指揮をとることになった。エジョーフは，ヤーゴダの下で粛清にたずさわった幹部を消し去り，第一回「モスクワ裁判」のために働いた予審判事たちを一掃した[注25)]。

「モスクワ裁判」は，典型的なでっちあげ裁判であったために，それが終れば，関係者は消えなければならない。被害者も加害者も「恐怖の平等」をあじわう。

1937年1月，第二回「モスクワ裁判」がひらかれ，ピヤタコーフ，ラーデックなど十七人のうち十三人が銃殺になった。ラーデックは，裁判での働きが認められたのか，銃殺をまぬがれ，収容所にいれられた。スターリンに媚び諂ったこの男が，収容所でどのようになったかは，不明である。

この年の6月，トウハチエフスキイ元帥以下の赤軍の最高幹部が銃殺された。

1938年3月，最大の敵ブハーリンのために第三回「モスクワ裁判」がひらかれた。この裁判では，第一回公判の下準備をしたヤーゴダ自身が被告として坐っていた。十五年間スターリンにつかえたヤーゴダは，かつて自分が他人につけた，外国のスパイ，トロツキイの手先というレッテルをはられ，自から処刑に立ちあったジノーヴィエフ，カーメネフの一味として，坐っている。

内務人民委員部の高官であったアレクサンドル・オルローフ（偽名）によれば[注26)]，キーロフは

内務人民委員部によって殺されたというううわさが，民衆のあいだに根づよくあった。スターリンは，それをもみ消すには遅すぎると考えて，ヤーゴダに殺人の罪をおわせることにした。真実の部分的確認によって，民衆の危険な疑惑に終止符をうとうとした。ジノーヴィエフ，カーメネフによってキーロフ暗殺が計画されたことになっている以上，ヤーゴダを彼らの一味にしたてあげるのは論理的に当然であった。

ヤーゴダが消えた数ヵ月後，11月には，エジョーフが内務人民委員を解任され，水運人民委員に任命された。ヤーゴダが郵政人民委員に転任したあと，逮捕されたように，政治的に重要でない地位に移されてから粛清されるのが，ほぼきまりになっていた。エジョーフは，1939年3月の第18回党大会の開会式にでたのを最後に公衆の前から永久に姿をけした。代って，ベーリヤが登場した。彼は，スターリンの死の直後に銃殺された。アフマートヴアは，ベーリヤより十三年なが生した。詩人は，悪よりもながらえ，権力をやりすごす民衆の一員になることができた。

レフが再逮捕されたとき，アフマートヴアは，またもや，スターリンに手紙を書いた。今度は，なしのつぶてであった。シヨーロホフは，レフ釈放のための助力を申し出た。しかし何もできなかった[注27)]。

二六才のレフは，十字獄で十七ヵ月すごしたあと，エニセイ河流域の収容所におくられた。収容所のあと流刑になり，1944年流刑地のトウルウハン地方から志願兵として戦場へむかった。ここは，スターリン自身が，革命前に流された所である。レフは，戦後，1949年11月6日革命記念日の前夜に三たび逮捕された。アフマートヴアは，息子に死の危険を感じ，今度は，手紙ではなく，奴隷的な詩をスターリンにささげた。この讃歌は，フアジェーエフ[注28)]のおかげで雑誌『ともしび』にのった。しかし，レフは，モクスワのレフオルト監獄に移され，1950年9月に十年の刑をうけた。罪状は，以前刑を受けたことがある，というものであった。再犯ではない。再罰である。レフは，カラガンダー地方におくられた。彼は，スターリンが死んで三年たった1956年5月14日に釈放された。彼は，四三才になっていた。詩人である母親は，自分のために何もしなかったと息子は誤解し，母と子のあいだに不和がはじまった。そこには，父親も母親も詩人であったために，背おわされた悲運にたいするいきどおりがまじっていただろう。レフは，人生の最も活動的な時期をうばわれたにもかかわらず，東洋史家として業績をあげ，現在レニングラード大学歴史学部の教授である。

『鎮魂歌』は，主として，レフが二回目に逮捕された1938年から三年間に集中的に書かれた。全体としては，1935年の詩から1961年の題銘までの二六年間の年月が反映されている。この数字は，創作の時間だけでなく，命がけでそれを保存してきた期間を意味する。

時代の変化に期待して，アフマートヴアは，1962年にはじめて清書原稿をつくった。しかし，それは，祖国では印刷されず，次の年アフマートヴアの承諾なしにミュンヘンで出版された。二年後に，彼女は病死した。

『鎮魂歌』は，今だに禁書のままである。

2

十七年間コルイマーの収容所にいれられていたヴァルラーム・シャラーモフ[注29)]は，収容所の内部からこの時代をみごとにとらえている。

東北シベリアのコルイマー河流域にある収容所に，クリストという囚人がいた。彼は，字が上手だった。予審判事は，彼に書類の清書をやらせた。クリストが書き写していったのは，処刑予定者のはてしない名簿であった。ある日，予審判事は，氏名をクリストに書きとらせている途中で，突然つまってしまう。クリストの名が出てきたのである。仕事の助手としてクリストが必要な予審判事は，クリストの一件書類をばらばらにひきちぎり，火の中へ投げこんだ。「紋切型の仕事だ。連中は，自分で何をやっているのか分らないんだ。関心もないんだ」，と彼はいった。処刑者の名簿が機会的につくられていく。名簿の作成者は，自分のやっていることに無関心になっている。惰性で死者がえらばれていく。その中から誰かの名をけずりとっても分らない。クリストの仲間の囚人たちは，大部分銃殺された。当の予審判事も銃殺された。書類を焼いてもらったクリストだけは，生きている。彼の命は，「死をあたえる者から死を受けとる者への贈物」であった[注30)]。

割りあてられた数字があまりにも多かったので，死者の名簿は，官僚的につくられた。なぜなら，数字が命令者であったからである。

アフマートヴァは，このような時代を，詩人としてひきうける決心をしたのである。それは，一人の母親としての生を助け，同時に，困難にした。

『鎮魂歌』は，ほとんどシェレメーチェフ邸でつくられた。それは，帝政ロシヤの大富豪シェレメーチェフ一族の屋敷で，噴水邸とよばれていた。アフマートヴァは，この広大な古屋敷の一すみに住んでいた。住宅難から，文化財が共同住宅になっていた。

詩人は，あの苦しみの行列について書くことはできなかった。「扉が扉に，錠がふたたび錠になるように」[注31)]，と願わなければならない状況のもとでは，書くことも原稿をしまっておくことも危険であった。国家権力の前には，扉も錠も役にたたなかった。

「恐怖と詩神」が同居する部屋で，アフマートヴァは，黙って歌う。壁も天井も耳をもっていた。彼女は，原稿をもたない。詩は紙以外のものに保存しなければならない。扉と錠の無意味さに耐えられる保管場所が必要である。

それは，人間の記憶である。

リージィヤ・チウコーフスカヤが噴水邸に通ってくることになった。彼女は，「人民の敵」の妻であった。夫マトヴェーイ・ブロンシティンは，物理学者でレニングラード大学教授であった。彼は，1937年8月に逮捕され，1938年2月18日銃殺された。夫の死は妻に知らされなかった。チウコーフスカヤは，夫が殺されているのを知らないまま，彼の運命を案じる不安な毎日をおくっていた。彼女も，「人民の敵」の妻として，いつ逮捕されるか分らなかった。彼女は，幼い子供を

かかえていた。その子供に内務人民委員部は関心をもっていた。父親の復讐をするように教育されていないか，と彼らは注目していた。

チウコーフスカヤは，児童文学者，文芸学者，英文学者コルネーイ・チウコーフスキイの娘である。彼女は，編集者であり，ゲルツェンの研究家であり，作家であった。

「貧困は，だれのじゃまにもなりませんでした。悲しみも，そうです。レンブラントは，妻，息子，母親など身内が皆死んでしまった生涯の最後の二年間に，すべての代表作をかきました。いいえ，悲しみは仕事のさまたげになりません」[注32]。

アフマートヴアのこの言葉を証明するかのように，息子と夫をうばわれた二人の女は，仕事をする。

噴水邸には，かってパーヴェル一世が廷臣たちのおしゃべりを盗み聞きしたという鏡の間がある。パーヴェルは，その猜疑心で五年間帝位をたもつことができただけで，廷臣に絞殺された。アフマートヴアとチウコーフスカヤは，盗聴を警戒しながら向いあう。レフは，「家での会話」がもとで1935年に逮捕されている[注33]。天井や壁に耳を想定するのは，妄想ではなかった。

「彼女（アフマートヴア）は，とつぜん会話の最中にだまりこんだ。それから，警戒するように天井に目をやり，わざと世間話をした。わたし（チウコーフスカヤ）も調子をあわせた」[注34]。

詩人は，頭のなかにすっかりできあがっている詩句を，紙の切れはしに書きつける。それをチウコーフスカヤにわたす。彼女は，すぐさま暗記する。すっかり記憶のなかにおさまったのをたしかめてから，彼女は，その紙きれを詩人にかえす。アフマートヴアは，灰皿のなかで，それを焼く。詩は消え，灰が残る[注35]。

これは，火刑か火祭りか。

火刑である。

「重ぐるしい時がくる。たった今，悪事がなされた。まるで二人で，たった今，新生児をしめ殺したかのようであった」[注36]。

火祭りである。

昔，神にささげるために，生贄は，火に投げられた。火は，生贄を天へとどけると考えられた。今，詩は，未来の人々の記憶にとどくように，火にくべられる。

詩神は，古代ギリシヤでは，主神と記憶の女神との子である。記憶は，詩の材料をたくわえる。スターリン時代では，記憶は，詩そのものの保管場所をかねる。

チウコーフスカヤは，語ることの許されない語り部である。

「『鎮魂歌』を，たとえ一行といえども，忘れることは，わたしの側からの裏切りになるだろう。それを筆記しておくことは，裏切りよりも悪いことである。それは，罰あたりな行為である」[注37]。

記憶係は，狂気よりも長生きすることを要求される。時代よりもはやく死んではならない。忘れず，書きとめず，人にもらさず，ながらえなければならない。

アフマートヴアは，詩ができると，チウコーフスカヤをよびだす。あるときは，以前の詩句を

かえる。チウコーフスカヤは，古い文句も新しい表現も両方とも覚える。変更があったことを記憶にとどめる。異文も注もついた一冊の詩集が，記憶のなかでつくられていく。チウコーフスカヤは，この時期につくられた『鎮魂歌』以外のアフマートヴアの詩もほとんど全部暗記した。

この時代のこの国には，さまざまな記憶係がいた。アフマートヴアが，苦の行列につらなっているとき，マンデリシタームは，コルイマーの収容所の手前で衰弱死した。マンデリシタームは，妻のナジェージダに詩を吹きこんでおいた。彼女は，まるで詩を喰う獣のように次から次へと自分の内部へためこみ，記憶のなかにマンデリシターム詩集をつくった。夫の死後，国内をさまよいながら，詩集を記憶のなかにたもちつづけた。彼女は，スターリンより長生きした。夫の死から三六年たった1974年に，彼女は，『マンデリシターム詩集』を手にすることができた[註38]。その詩集には，マンデリシタームの全生活をゆがめた序文がつけられていた。それにもかかわらず，詩人の母国で印刷されたことは，記憶係の勝利であった。詩集を手にしたときは，ちょうどアカーキイ・アカーキエヴィッチが新しい外套を手にしたときのように，彼女の人生の祭りであった。

忘れないように，自分にむかって詩をつぶやくとき，彼女は生きぬくための呪文を口にしていた。

呪文は効いた。

ブハーリンは，死の順番が近づいてくるのを予知したとき，後の世代にあてた遺書を妻に記憶させた。未亡人は，収容所のなかでそれをたもちつづけ，スターリン批判後に文字にした。しかし，ブハーリンは，歴史から抹殺されているので，その遺書を，新しい世代に公然と伝えることはできない。生きながらえた記憶係は，幸運な者と不運な者にわかれる。

1939年８月，レフは，収容所へおくられることになる。アフマートヴアには，十字獄の前でならぶ必要がなくなった。

監獄から収容所への移動は，無為から重労働へと生活の内容が変ることを意味する。

「監獄，これは自由である。これは，人びとが，恐れないで，自分の思っているすべてを話していた，わたしの知るかぎり，唯一の場所である。そこでは，人びとは精神的に休息していた。肉体的にも休息していた。なぜなら，労働がなかったからである」[註39]。

シャラーモフのこの指摘は，もちろん，一面的である。監獄では，前もって決められた罪状にそって自白させるために，拷問がおこなわれ，尋問中に死ぬこともあった。したがって，ある面から見れば，収容所の方がましであった。

シャラーモフは，労働という点で両者を区別し，労働の恐ろしさを強調している。

ニコライ一世治下のシベリヤの収容所で強制労働をやらされたドストエフスキイは，労働そのものをつらいと思ったことはほとんどなかった。シャラーモフにとって，ドストエフスキイの「死の家」は，死の家ではなかった。そこでは，労働が軽く，餓死の危険がなかったばかりか，食事はめぐまれていた。収容所でつくられるパンは，おいしいと町中の評判であった。わずかの金を調理人にだせば，余分の食事をつくってくれた。『死の家の記録』のなかで，一番おそろしいのは風

呂の場面である。しかし，風呂に入っているあいだに，下着につららがはっているようなことはない。

シャラーモフの世界では，「労働と死は，同意語である」[注40]。そこは，労働による衰弱死と餓死と凍死と銃殺にさらされている，本当の死の家である。

そこでは，死は無造作にやってくる。

「労働がきつい，と口にだしていうだけで，銃殺になるには十分であった。スターリンにむけられた，どんな批判がましいことでも，それがどんなにたあいのないものであっても，銃殺になる。スターリン万才と叫んでいるとき，自分だけ黙っていれば，銃殺になるには十分であった。沈黙，これは煽動である」[注41]。

数字の穴埋め式の囚人の製造は，労働条件が悪く，天然資源が豊かな僻地へ労働力を供給するためにもおこなわれた。内務人民委員部は，収容所経営をおこなう秘密経済警察のようなものになった。囚人労働による成果は，金の採掘であれ，運河の建設であれ，社会主義の勝利のあらわれとして宣伝された。収容所の責任者が，経済的な成果をあげるために，もっと囚人を送ってほしいと上級機関に要請することもあった。

レフは収容所へ送られた。

アフマートヴァは，「陶片」という詩をかく。七〇〇三キロはなれた辺地で，息子は，荒れすさんでいるだろうと詩人は心配する。

そして，

レニングラードのわたしの墓の上を
無関心な春がさまよう[注42]。

詩人が詩作する密室は，レフのいない墓場である。

しかし，詩人であり母親である者は，

恥辱の台の上にいながら
帝王の天蓋の下にいるかのように[注43]

ふるまう。

レフが，詩人としての自分の運命の一部だとしたら，

わたしはこの世のだれよりも罪がある[注44]。

息子は，詩人の運命をひきうけている。このおもいは，アフマートヴァに罪の意識をもたせる。この点で，彼女は，苦の行列の仲間たちとは異なる。母と子の関係のうえに，詩人の運命がのしかかる。彼女の詩には，この重なりが歌われている。

この重なりをつうじて，彼女は，

この悲しみの前には山やまも頭(こうべ)をたれ
大河も流れをとめる[注45]

という民衆の苦しみと一体化した。

1941年8月31日，マリーナ・ツヴェターエヴァが自殺した。この後，アフマートヴアは，ドイツ軍に封鎖されたレニングラードを脱出し，この年の11月9日，中央アジアのタシケントについた。

戦時中は，全国民を団結させる必要から，詩人への弾圧もゆるんだ。

「わたしたちの生涯の最良の時が，あのように多くの人が殺され，わたしたちが餓え，息子が収容所にいれられていた戦争中であったとは」[注46]，とアフマートヴアは，あらためて自分の運命におどろく。

創作する人間にとって戦争が「息ぬき」であったことには，ショスタコーヴィッチも同感である。

人間が顔を失った時代に，ショスタコーヴィッチは鎮魂歌を作曲したかった。それを義務だと思った。しかし，彼も，また，悲しみ苦しみの表現を禁じられていた。「おそろしい皆殺しの機械」[注47]を楽譜であらわし，抗議することは不可能であった。戦争がはじまった。悲しみは共通のことがらになった。ドイツ軍に殺された人に涙を流すことは許された。この涙に，スターリンの犠牲者への涙を合流させることが可能になった。ドイツ軍がもたらした悲劇的などさくさにまぎれて，収容所の肉親の身の上に涙することができるようになった。だから，戦争は，この点でも，「息ぬき」であった。

アフマートヴアもショスタコーヴィッチも，戦争の地獄のなかで一息ついた。戦争がおわれば，どうなるか明らかであった。

あなたたちはわたしを屠殺された獣のように
血まみれの鉤にかけるだろう[注48]

と，アフマートヴアは，戦後の自分の運命を正確に予言した。

（連作第一部おわり）

（注）

1）囚人の苗字によって，差しいれの日が決められた。たとえば，レフの苗字は，グミリヨーフなので，Гの頭文字をもつ苗字の囚人に差しいれできる日に，アフマートヴアは通うことになる。
獄舎の前の行列や囚人の家族の状態については，次の作品にくわしく再現されている。
Лидия Чуковская, Опустелый дом, "Пять континентов", Париж, 1965.

2）Анна Ахматова, Реквием, "Товарищество Зарубежных Писателей", Мюнхен, 1963, стр. 8.

3）1925年，党の決定によって，アフマートヴアの詩の発表は禁じられたという。
Amanda Haight,Anna Akhmatova.A Poetic Pilgrimage,Oxford University Press,New York and London,1976,p.80.

4）Надежда Мандельштам, Воспоминания, Издательство имени Чехова, Нью Йорк, 1970, стр. 390.

5) Александр Орлов, Тайная история сталинских преступлений, "Время и мы", Нью Йорк-Иерусалим- Париж, 1983, стр. 206.

6) А. А. Зимин, А. Л. Хорошкевич, Россия времени Ивана Грозного, "Наука", Москва, 1982, стр. 106.

7) А. Авторханов, Технология власти, "Посев", Франкфурт, 1976, стр. 389.

8) Тайная история сталинских преступлений, стр. 33.

9) キーロフ暗殺については，スターリンの死とスターリン批判の間に出た百科辞典でも，この「自白」の内容が史実としてあつかわれている。
Энциклопедический словарь, т. 2,"Большая советская энциклопедия", Москва, 1954, стр. 78.

10) 芸術学者。アフマートヴアは，プーニンと別れたがっていた。

11) Технология власти, стр. 403-404

12) 同上　405頁

13) 1889－1954。作家。

14) Лидия Чуковская, Записки об Анне Ахматовой, т. 2, YMCA-PRESS, Париж, 1980, стр. 347.

15) 同上　136頁

16) Менахем Бегин, В белые ночи, "Москва-Иерусалим", Тель-Авив, 1978, стр. 222-225.

17) Илья Эренбург, Собрание сочинений в девяти томах, т. 9, "Художественная литература", Москва, 1967, стр. 192.

18) アフマートヴアの最初の夫グミリヨーフと二番目の夫シレーイコとが共同で出した本がある。
Гильгамеш, Вавилонский эпос, перевод Н. Гумилева, введение В. Шлейко, Издание З. И. Гржебина, С. -Петербург, 1919.

19) 参照 А. Солженицын, АРХИПЕЛАГ ГУЛаг, т. 1, YMCA-PRESS, Париж, 1973, стр. 106.

20) Николай Гумилев, Собрание сочинений в четырех томах, т. 1, Регенсбург, 1947, стр. 9.

21) 1896－1948. 党中央委員会書記であり，1934年から十年間レニングラードの最高指導者であった。

22) Записки об Анне Ахматовой, т. 1, стр. 14.

23) Анна Ахматова, Стихотворения и поэмы,Библиотека поэта,"Советский писатель", Ленинград, 1977, стр. 190.

24) В белые ночи, стр. 304.

25) Тайная история сталинских преступлений, стр. 212-214.

26) 同上　244頁

27) Анна Ахматова:Стихи,переписка,воспоминания,иконография,"Ардис",Анн Арбор,1977,стр.107.

28) 1901－1956. この時，彼は作家同盟の幹部会議長であり書記長もかねていた。スターリン批判後，自殺した。

29) 1907－1982. ソヴエトでは，数冊の詩集が出版されているが，代表作『コルイマー短篇集』は，外国でのみ印刷可能である。二二才のときから，逮捕，監獄，収容所をくりかえし経験した。最終的に解放されたのは五十才のときであった。死の数日前，精神病院にいれられた。

30) Варлам Шаламов, Колымские рассказы, 2-ое издание, YMCA-PRESS, Париж, 1982, стр. 296.

31) Памяти А. Ахматовой, Стихи, письма, воспоминания, YMCA-PRESS, Париж, 1974, стр. 23.

32) Записки об Анне Ахматовой, т. 1, стр. 89.

33) Анна Ахматова : Стихи, переписка, воспоминания, иконография, стр. 111.

34) Памяти А. Ахматовой,стр. 52.

35) 同上

36) 同上

37) 同上　52－53頁

38) О. Мандельштам,Стихотворения, Библиотека поэта, "Советский писатель", Ленинград, 1974.

39) Колымские рассказы, стр. 278.

40) 同上　320頁

41) 同上　287頁

42) Памяти А. Ахматовой, стр. 16.

43) 同上　15頁

44) 同上　16頁

45) Реквием, стр. 9.

46) Надежда Мандельштам, Вторая книга, YMCA-PRESS, Париж, 1978, стр. 285.

47) Testimony.The Memoirs of Dmitri Shostakovich, Harper & Row,New York,1979,135p.

48) Памяти А. Ахматовой, стр. 16.